



# 『中寺地区』をたずねて

中寺地区は姫路市の北部、香寺町の北半にあたり、北は福崎町に接する。東は市川、西は棚原山系に境され、東寄りをJR播但線と国道312号線が南北に走る。地形は恒屋川の谷底平野と市川西岸の低地、台地、そしてそれに続く丘陵山地からなる。沖積低地は下台(下代)、台地面は上台(上代)とも呼ばれ、前者には市川がかり、後者にはため池がかりの水田が広がる。

開発の歴史は古く、縄文時代からの遺跡が台地や低地で確認されており、片山古墳などの古墳群が点在する。岩部は播磨国風土記の的部里の遺称地とされ、また、土師の東前畑遺跡や溝口廃寺跡などを合わせ考えると、古墳時代から奈良・平安時代にかけて当地は古代神崎郡の政治的、文化的一中心ではなかったかと思われる。中世では当地域の大半は的部北条、恒屋谷は高岡南条と呼ばれ、天皇家領や撰家領であったが、しだいに武士の手に移っていったようである。恒屋城は15世紀に築城された中世の典型的な山城である。城主恒屋氏は赤松氏の家臣であったが、播磨に侵攻した秀吉に降ったといわれる。江戸時代をとおして姫路藩領であり、生野街道で姫路城下に通じ、渡し舟で川東の神東郡や北条との往来も盛んであった。村数は9か村で、うち2か村は山崎組(現福崎町)に属し、他は香呂地区の村々とともに一つの大庄屋組を構成していた。米麦、綿作を主とする純農村で、年貢米は市川の舟運、高瀬船で飾磨の港などへ運ばれていた。

地域の景観は近世以前とは大きく変わっている。禿山であった周囲の山々は明治以後に植林されて緑に覆われるようになった。耕地は圃場整備で古代からの条里制区画が姿を消し、恒屋川は改修されて下流は放水路の開削で広瀬北から市川に注いでいる。道路は集落から集落へと結ぶ旧道から耕地を横切る直線の新道へと移ってきた。

明治22年(1889)の市制町村制で9か村が合併して中寺村となり、昭和29年(1954)、香呂村と合併して町制をしき香寺町となる。昭和50年代には、姫路市北郊の住宅地として急速に開発が進み人口が倍増した。平成18年(2006)3月に姫路市に合併する。

①**大妻井堰** 下台の村々(溝口から犬飼まで井郷9か村)の耕地を潤す大妻用水の取り入れ口。かつては現在の香福橋の下手から取水していたが、寛政5年(1793)、田野組大庄屋清瀬弥兵衛の願い出によって岩盤を開削して新しい水路が開かれ、現在ようになった。この工事によって下流の村々の干損は少なくなったという。



①大妻井堰

②**手城山開路碑** 旧生野街道は溝口の北端で段丘上に上がり、手城山の西を北上していた。明治初年の馬車道の開通以後この道が廃れたため、明治12年(1879)、地域の人たちが資金を集めて改修を計画し、手城山の東を回る市川沿いの新道を新たに開いた。その経緯を記したのがこの碑である。現在はさらに手城山を切りとおして抜ける直線的な道路へと変わっている。



②手城山開路碑

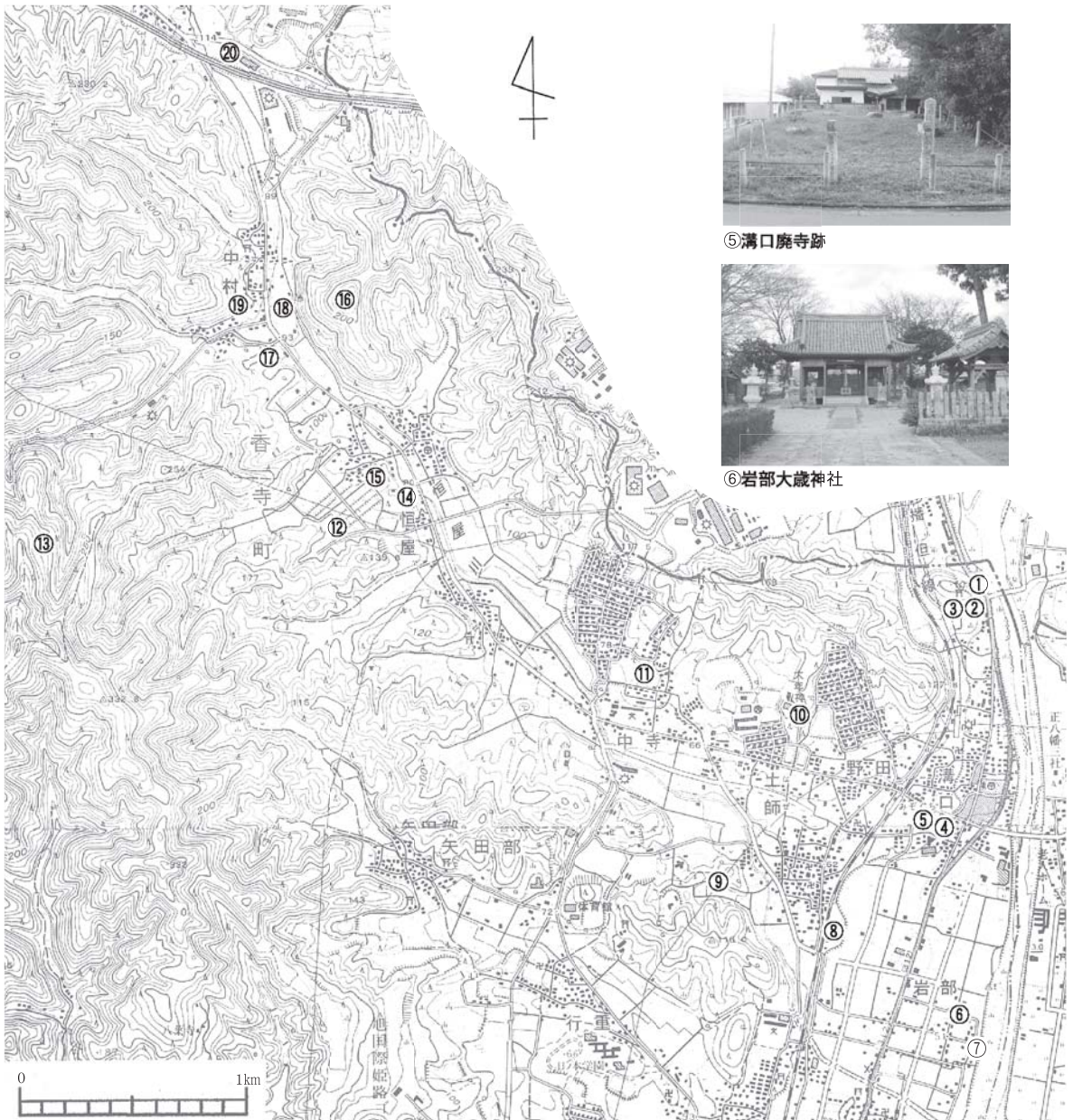
③**広田神社** 円覚寺の鎮守で、西宮広田神社の分霊を勧請したと伝える。古くは溝口集落の南、市川に近い低地にあったが、延宝7年(1679)、円覚寺の西に移され、明治2年(1869)の神仏分離で現在の手城山に遷座した。溝口の各垣内には、トンドが終わった1月14日の深夜、この境内に祀る賽の神、道祖神に参る「お頭」の行事が今に続いている。



③広田神社

④**円覚寺** 曹洞宗で永平寺の末寺。寺伝によると聖徳太子の勅願によって建立されたと伝え、山号も所在地も聖徳山という。永く荒廃していたが、延宝元年(1673)、姫路藩主から境内の寄進を受けて再興された。太子ゆかりの太子堂の再建は明治11年(1878)で、その後、2月の太子例祭が盛大に催されるようになり、近郷近在から多くの参詣人で賑わっている。

⑤**溝口廃寺跡** 円覚寺境内の南側に、かつてここに大伽藍があったことをう



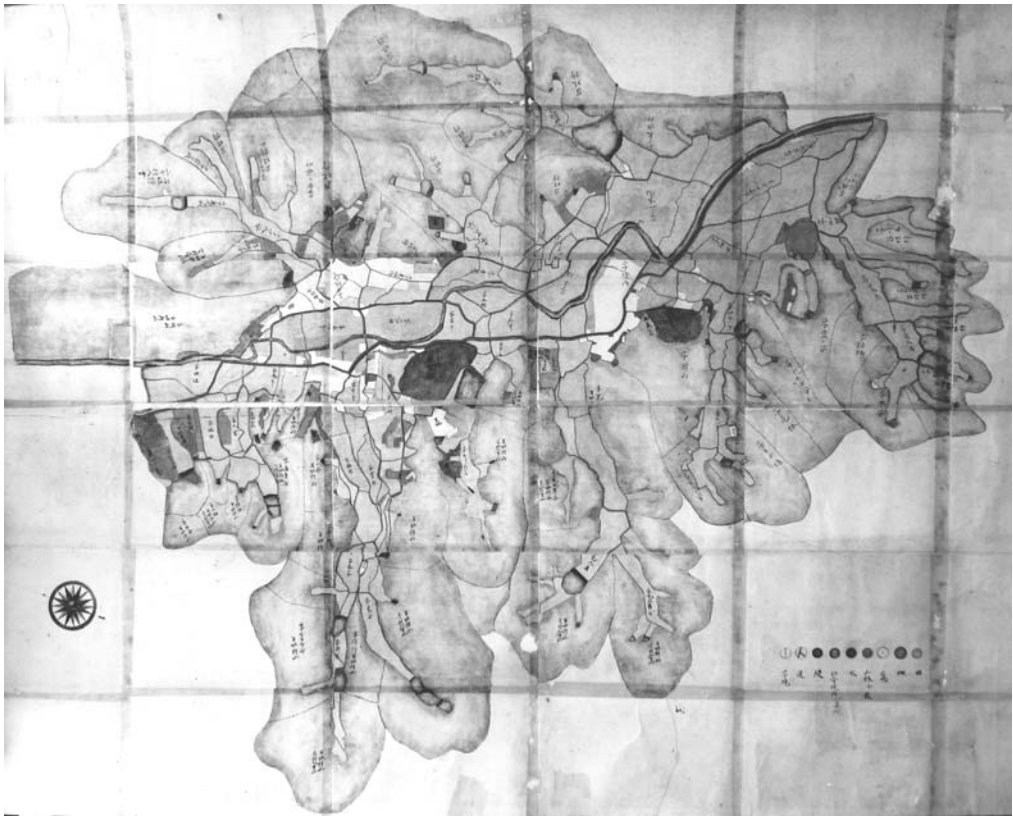
中寺地区の文化財分布図 (S = 1 : 30,000) この地図は姫路市域図 1 : 25,000 (北部・中部) をもとに作成した。

かがわせる塔礎石群がある。心礎は 3m×2m という播磨でも最大規模のものであり、周辺からは奈良時代前期(白鳳期)の瓦も採集されるなど、近くに中央と結びついた古代有力豪族が存在したことを物語っている。戦前から聖徳太子大塔跡として知られ、現在は溝口廃寺跡として県の史跡指定を受けている。

⑥大歳神社 岩部の氏神。岩部の集落は西の山麓、香寺中学校付近から現在の低地に移ってきたといい、神社ももとは学校の裏山にあったという。低地での農業は洪水との戦いであったと想像され、神社に大蛇にまつわる伝説が伝わる。豪雨で市川の堤防が切れ、濁流で村が押し流されそうになった時、一匹の大蛇が現れ身を横たえて堤防となり濁流をせき止めた。村人はこれにいたく感謝し酒を捧げたという。これが岩部の「樽かき」の由来とされ、市の無形民俗文化財として今に継承されている。

⑦岩部の渡し場跡 江戸時代、市川には橋がなく、徒渡りか渡し船であった。対岸の船津村三又(姫路市)との間に横渡しが始まったのは寛保元年(1741)で、神東郡や加西との往来に盛んに使われた。明治以後は岩部村の責任で営業していたが、大正 3 年(1914)、広瀬に大礼橋がかかってからは使われなくなったようである。三又に横渡しの記念碑が建てられている。なお、溝口にも渡し船があった。





恒屋村絵図 「播磨国第十大区第二小区 恒屋村」との記載があることから、明治15年(1882)前後に作製されたものと考えられる。  
(左が北) (北恒屋自治会所蔵)

⑧東前畑遺跡 溝口廃寺から西南に続く台地上で、平成16年(2004)に確認された複合遺跡。縄文時代の遺物や弥生時代から平安時代にわたる建物遺構、祭祀関連遺構が発掘された。長期にわたった定住生活のうかがわれるとともに、祭祀遺構や大型の掘立柱建物群と溝口廃寺跡との関連を考えると、政治的・文化的に特別な役割を担った集落ではなかったかと推測される。



⑧東前畑遺跡出土墨書土器

⑨片山古墳 標高81mの尾根上に築かれた全長約30mの前方後円墳で、築造は6世紀中頃とみられている。大正12年(1923)に陪塚が発掘され、太刀や埴輪、高杯などが出土しているが、主体部の発掘はされていない。この年、県から史跡片山古墳として指定され、地元では数年かけて玉垣をめぐるなど古墳の保存工事を行った。昭和48年(1973)に改めて県文化財(史跡)に指定されている。



⑩土師大年神社

⑩大年神社 土師の氏神で元郷社。祭神は農耕の神、大年神で当地方では各地で祀られている。創始は神功皇后行幸説話に因んで説かれるが年代は不詳、鎮座地も3回移転しているという。秋の例祭に奉納される獅子舞は、古くは天正19年(1591)に船津正八幡神社の祭礼に獅子頭を奉納したとあるが、現在の獅子舞は明治時代、犬飼から伝えられたという。土師獅子舞保存会が継承し、市指定無形民俗文化財。



⑫清瀬安太夫顕彰碑

⑪醍醐寺 日蓮宗寺院で万治2年(1659)頃の創建。当地区は中央(字中尾)に古くからお寺(薬師堂)があったことから中寺と呼ばれるようになったと伝える。村人はかつて一向宗の信者であったが、山崎村(現福崎町)の日蓮宗妙法寺日達の説法に皈依して、一村挙げて改宗。日蓮を開基とし、薬師堂を醍醐寺に改めたという。戸長役場時代、東隣に役場が置かれたので、この本堂が各種会合に使われていた。

⑫清瀬安太夫顕彰碑 安太夫は北恒屋の向山に3町歩を開田した恩人。西の

棚原山系から伸びる低い尾根向山の開発は、ため池を築き、用水路を引く難工事で、13年をかけてようやく天保14年(1843)に完成した。この碑は、110余年後の昭和30年(1955)、地元の人々が改めてその功績を墓碑に記し、ここに移して建立したものである。

⑬**棚原明神** 神功皇后が天神地祇を祀ったのが始まりといい(『播磨鑑』)、標高401mの山上に今も小さな祠がある。赤松氏が守護神として置塩城内に祀ったが落城の後3カ所に分祠され、その一つが北恒屋の櫃倉神社だと伝える。山上から東北に少し下がったところに削平地があり、寺屋敷と呼ばれているが、ここが『峯相記』にもある棚原山、すなわち出湧寺(棚原廃寺)の跡であろうとされる。

⑭**櫃倉神社** 北恒屋の氏神。創始は上記棚原明神であげた説ともいうし、同明神の神庫の跡ともいう。8月31日の晦祭りには、<sup>みそか</sup>晦踊りとよばれる播州地方最後の盆踊り、櫃倉踊りが境内で行われる。近隣から音頭師が集まり夜を徹して播州音頭で踊り明かしたという。北恒屋播州音頭は市の無形民俗文化財に指定され、保存会で継承されている。境内の不動明王堂の石不動は室町前期の数少ない優品である。

⑮**光輪寺** 浄土真宗本願寺派の寺院。同地区にある天文11年(1542)創建の祐光寺からの分かれである。両寺院とも学僧を輩出したことで知られるが、ことに光輪寺は幕末、学寮集蛭閣を開いて全国から寺院子弟が入門した。同寺の報恩講では近隣では珍しい恒屋雅楽(市指定無形民俗文化財)が保存会の手で奏される。また、同寺は棚原山出土の宝篋印塔基礎や不動明王像、五重塔などの石造物を所蔵している。

⑯**恒屋城跡** 北恒屋の城山にある中世の山城跡。赤松氏の家臣恒屋氏の居城で、長祿2年(1458)頃に築かれたという。標高236mの山頂を削平して築かれた後城と東南に続く尾根の先端部に設けられた前城からなる。前・後の城とも数段の曲輪(削平地)が作られ、畝状堅堀や土塁をめぐらしている。城跡から置塩城や大坂城と同汎の瓦が採集されており、全国的にも早い時期に瓦を用いた山城とされている。

⑰**中村構居** 中世の在地領主の居館跡。地元では姫屋敷と呼ばれており、すぐ隣の御屋敷と呼ばれる香寺荘敷地とともに恒屋城と関連のある居館跡と見られている。『播磨鑑』では、中村構居の方は恒屋の家老花村将監の居館とある。居館は尾根の先端部を削平して構え、背後を堀切で断ち、周囲に堀をめぐらせている。町内に居館跡はいくつかあるが、このように遺構が完全な形で残っているのはここだけで、重要である。

⑱**中村温泉** 城山の麓に開かれた一軒宿の温泉。泉質はアルカリ性含塩炭酸泉で夢前町の塩田温泉とまったく同じである。泉源が発見されたのは明治19年(1886)で、医療効果があり、飲用にも適するということから、はじめ神西炭酸水として売り出し、内国勸業博覧会に出品した。続いて明治26年(1893)にはシカゴ万博に出品し、優良だと表彰されている。北恒屋でも同年、鉱泉が発見されており、今は香寺荘の泉源である。

⑲**薬師堂** 中村の西、小高い山麓にある。かつては万福寺と称えたというのが、由緒は不明。本尊の薬師如来坐像は、棚原廃寺から移されたという伝承があるが、寄木造で鎌倉中期の作と思われる。市指定文化財。一段下に薬師庵(本尊阿弥陀如来)があったが、どちらも改築して今は合併されている。堂の横に大日如来を乗せた廻国塔や地蔵、聖観音など5基の石造物が立っている。

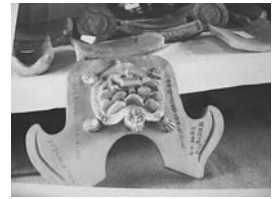
⑳**清瀬源十郎頌徳碑** 地域の農業の発展に尽くして老農と呼ばれた清瀬源十郎の顕彰碑。源十郎は文政11年(1828)中村に生まれ、明治38年(1905)没。農法の改良、開墾、ため池の改修・増築に努め、神東西両郡の産出米改良組合や勸農会の設立の中心となる。地元では種籾の塩水選や正条植で知られる。藍綬褒章受章。没後、中寺村をあげてその功績を称え、この碑を建てた。



⑬棚原明神



⑭櫃倉神社



⑯恒屋城跡出土瓦

⑮光輪寺

⑯恒屋城跡

⑰中村構居



⑲薬師堂の石造物



⑳清瀬源十郎頌徳碑

■編集 大槻 守(香寺町史編集室長)